



消える月 シンドウ・ポーターによる再話

この物語は、2020年7月4日土曜日にグループルニマーを祝う

「テンプルの中にいなさい」のサツァングで語られました。

チヨノは、山あいの禅宗の尼寺で、ほんの数カ月だけ奉仕をしました。その尼寺で必要とされることをいつでも何でもすることは、その囲いの中での厳格な生活を生きることに彼女を引き寄せました。他の人を手伝ったり、滑らかな石の床を掃いて拭き清める作業をする中で、彼女が考えられたのは悟りへの切望だけでした。彼女は、自分をそこに導いてくれる道を熱烈に求めました。

ある日、チヨノは勇気を出して、外の庭に向かう道すがら彼女の方へ歩いて来た年配の尼僧に近づきました。静かな声でチヨノは尋ねました。「私は卑しい身分の生まれで、読み書きができません。技能がなくても、いつの日か仏の道に到達する方法はありますか？」

尼僧はほほ笑んで、大きな声で言いました。「素晴らしい質問ですね！ 仏教では、一人一人が自分自身を目覚めさせたいという願望を固守しなければなりません。あなた自身の本質を知るために、修行をしながら自分の思考の源へ向かいなさい。いつでも覚えていなさい——そこには完全な本質のみがあるのです」

親切な尼僧の言葉を思い出しながら、チヨノはすべての日常の作業に——大小にかかわらず——より一層注意を向けることを決意しました。それぞれの行動に、この教えを適用し、完全に

自分自身を投じました。彼女が焦点を当てたのはこれだけです。それは、大切な目標から彼女を引き離すかもしれない思考を追い払うことでした。

ある静かな満月の夜、チヨノは外で水を入れようと手おけを組み立てました。戻る途中、彼女は手おけに満たされた水に映る月に注目しました。何と輝いてまん丸な月でしょう！ 突然、手おけの下部の籬(たが)が外れ、底が抜けてしまいました。水が一滴残らず地面に飛び散り、消えてしまいました。その予期せぬ瞬間に、水に映る月も消えてしまいました。まばゆい月は水と共に一瞬にして消え去りました。これを見て、少女は切望していた悟りの境地に到達したのです。

チヨノは体験を描いた詩を書きました。

私はこうしたりああしたりして、

竹の手おけを一つにまとめようとした、

決して壊れないことを願って。

突然、底が抜けた。

もう水はない。

水がない所に、もう月は宿らない。

私の手の中には、空(くう)だけがある。



© 2020 SYDA Foundation®. 著作権所有。